



vol.05

亜細亜大学
国際関係学部編集



KaYa
05
亜細亜大学
国際関係学部

ISSN 2188-3122

国際関係・多文化
フォトジャーナル

Asia University Faculty of International Relations

Contents

04 ベトナム冥器／
冥具考事始め
大塚 直樹

ESSAY

12 英語教育サービスを
販売するフィリピン
小張 順弘

ESSAY

22 銅像よもやま話5
右手を挙げる人
高山 陽子

銅像よもやま話5

ゼミナール紹介

28 「日本からEUを理解する
～第6回EUセミナー参加記録～」
太田 瑞希子

太田ゼミ

33 国際関係学部BLOG更新中!

ゼミナール課外活動

34 国際関係学科 荒井ゼミ
海外合宿・IBインカレ
荒井 将志

学部行事報告

40 多文化コミュニケーション学科アジア祭参加企画
「多文化トラベル2017」展示部門優秀賞に輝く
新妻 仁一

学科FD活動報告

44 多文化パスポートの利用促進
高山 陽子



かや 榎とは



亜細亜大学内のゆうちょ銀行ATMの裏側に記念樹があります。それが榎の木です。この記念樹は、1941（昭和16）年の本学創立当初に植樹されました。先達に敬意を表わしつつ、半世紀以上にわたり本学の歩みを見守ってきた榎とともにグローバル化時代に挑戦してゆこうという国際関係学部の思いが本ジャーナル名の由来です。



亜細亜大学 国際関係学部

〒180-8629 東京都武蔵野市境5-24-10

学部についての詳細は

<http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/>

『榎』はPDFデータでも閲覧いただけます。
※亜細亜大学学術リポジトリから入手できます。

ESSAY

ベトナム冥器／冥具考事始め

大塚直樹

はじめに

まずは写真1をみてほしい。この写真は昨年二〇一七年二月末に引越しをしたベトナム人の知り合いがSNSで送信してきた。ホーチミン市在住のこの知人は、入居前につつがなく居住できるように家内安全を祈念し、供え物をしたという。写真には、



1.入居前の家内安全祈願の供え物

花・果物および線香とともに、左側の部分に紙でつくられたものが写っている。これはいわゆる紙製の祭祀用品である。一般的にはこの後、焼却し、祖先や神への供物とする。知人は、こうした宗教行為をcungと表現した。翻訳すると「礼拝する、寄贈する」といった意味になる。さらに知人に礼拝の対象を問うと、「すべて」という

返答が戻ってきた。ここでいう「すべて」とは、神であり、仏であり、さらには祖先が含まれている。

本稿ではこうしたベトナムの冥器／冥具、とくに紙製の祭祀用品について概観し、ホーチミン市における具体例を紹介してみた。現地調査は、二〇一六年二月～二〇一七年一月、二〇一七年八月の二回、約二週間にわたりおこなった。あわせて同時に台北において補足的な参与観察調査を実施した。聞き取り調査の情報および掲載写真(写真1を除く)はすべて当該調査に基づいている。現時点で聞き取り調査が必ずしも十分ではないため、本稿では主として現地で撮影した写真を掲載しつつ、今後の研究への着眼点を得ることを主たる目的とする。

ベトナムにおける紙銭

ベトナムにおける紙銭の先駆的研究をおこなった芹澤は、ハノイ近郊の紙銭生産地での聞き取りを実施し、生産者の視点から

紙銭の現代的状況を明らかにした(芹澤、二〇一三)。この産地では、giay vang manと呼ばれる銭型を黄色い紙に刻印した紙銭(沖繩のウチガミに類似)を生産し、これをgiay tienと呼ぶという。giay vang maは「冥器(明器)としての金の紙」、giay tienは「銭の紙を意味する。そして、銭型を刻印した紙銭が「紙銭のなかの紙銭」であり、少なくともこの産地ではもともとも古い形であると指摘している。



2.閩渡宮(台北)の金紙

ことが容易に想像される。また、中国大陸や台湾の主として漢民族の間では、金紙が神に対して供えられ、銀紙が祖先に対して供えられるという形で使い分けがされるといふ(芹澤、二〇一三)。実際、台湾(台北)にある閩渡宮を訪問した際に、参拝に訪れていた人びとは金紙のみを供え、燃やしていた(写真2)。

紙銭分析—ホーチミン市の店舗にて

ここでは、ホーチミン市にあるビンタイ市場において売られていた紙銭を紹介する。ビンタイ市場は、ホーチミン市中心部、現在ではバックパッカーが集う空間としても有名になったファムグーラ才通りに立地している。この店舗は、市場の建物の周辺に拡張した周辺部に位置している。木造の屋台で露店のような形態になっている(写真3)。

聞き取りの範囲では、こうした祭祀用品は、tien、giay、bac、van、tien、bacと呼ばれるという。Bacは第義的に元素の銀を意味す



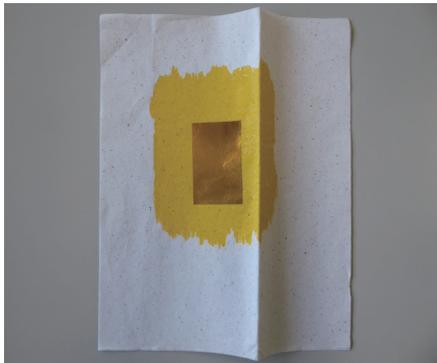
3.紙銭を販売する店舗



7.3,000ドンのセットの内訳:金色の紙銭。タテ9.5cmヨコ13.5cm

「地府通用」とともにNgan Hang Dia Phuと刻印された紙銭。Ngan Hang Dia Phuは「地府銀行」の意である。地府、つまりあの世の銀行で発行・通用する紙幣ということである。なお、この金色の紙銭は二つ折りできるようにしており、金の延べ棒を模しているようにも見て取れる。

この事例から興味深いことが三点ある。第一に、金紙とそれ以外の紙幣が区別されず、セットで販売されている点である。これは神と祖先に対する祭祀に明確な区別が



8.3,000ドンのセットの内訳:わら半紙に金色を塗った紙銭。タテ23cmヨコ18cm

されていない可能性を示唆している。今回の調査ではセットの内訳について個別の名称を確認できなかった。したがって、総称としてvien gray bacの概念が適用されるもの、今後聞き取りを進める過程で総称とは別の名称が判明する可能性も高い。ただし、現時点では後述のように現地の人びとの実践からみると、金紙とそれ以外の紙幣を明確に区別しているようにはみえない。

さらに、Vietnam Netにおいて民間信仰を解説した記事ではこうした紙銭全般に



9.3,000ドンのセットの内訳:わら半紙に銀色を塗った紙銭。タテ23cmヨコ18cm

対して、*vang ma* という用語が使われている (Vietnam Net, 2015)。同語を直訳すると「金製の冥器」となる。前述のように、芹澤によれば、*gray vang ma* は「冥器」としての金の紙であり、銭型を黄色い紙に刻印した紙銭であるという。しかし、Vietnam Netの記事に掲載された写真のキャプションでは、沖縄のウチガミにも似た紙銭だけでなく、少なくとも黄色い(ないし金色の)紙を使用した紙銭一般を指している。

また、同様にVnExpressの記事



4.紙銭のセット(左から5,000ドン、3,000ドン、5,000ドン)

ることから直訳では銀の(紙)銭となるだろうか。とはいえ『ベトナム語大辞典』によれば、*bac*の四番目の意味に金銭(*tiền*)とあることから、広く金(カネ)と捉えるほうが賢明かもしれない。また他のベトナム人は、*tiền an phu*と表現した。*an phu*は死者の国・世界といった意味になる。さらには「中国の習慣を踏襲した行為」と説明してくれた。

この用品店の女性店主は*tiền bạc*と言っていた。店頭にはさまざまな紙銭が販売さ

れていた。その中でセットになっていた三種類を購入した。全部で三〇〇〇ドンであった(それぞれ三〇〇〇ドン、五〇〇〇ドン、五〇〇〇ドン)。店主曰く「このセットは店で販売しているすべての紙銭を含んでいる」とのことであった。

ここでは三〇〇〇ドンのセットの内訳を確認してみた(写真4)。参考までにひとつかみの赤唐辛子(生)が二〇〇〇〜三〇〇〇ドン程度である。また、歩道にオートバイを駐輪した場合(路上駐車)、駐輪スペースでバイクを管理しているセキュリティに支払う金額(いわゆる駐輪代)が平均して五〇〇〇ドンである。

このセットには、七種類の紙銭が含まれていた(写真5〜11)。銭型が印字された黄色・白色の紙銭各五枚、金色と銀色が塗られたわら半紙各三枚、また財神と明記された金色の紙、さらにアメリカドル(一〇〇ドル)とベトナムドン(二〇〇〇〇〇〇ドン)の紙幣が各三枚である。金色の紙には「地府通用」と書かれており、ベトナムドン紙幣には



6.3,000ドンのセットの内訳:銭型を刻印した紙。タテ21.5cmヨコ27cm



5.3,000ドンのセットの内訳:銭型を刻印した金(黄)紙。タテ21.5cmヨコ27cm

実際に、ベトナムの人たちは、旧暦の正月を大切にしている。年齢を重ねる際も旧暦を基準にしている。つまりテトを過ぎると一歳年齢を重ねることになる。またテト前には賞与が出る（二三か月分の給与ないしお年玉と解釈される場合もある）。

さらに旧正月に重きが置かれている例として、ベトナムに滞在していたとき、普段グレゴリオ暦で日常の予定についてやり取りをしていた友人が旧暦の正月の前になる

と、そちらに準拠した日付を使い出したことがあげられる。旧暦とグレゴリオ暦の日付が大きくずれている場合にはとくに問題ないが、両者の暦が数日違いであるときには非常に混乱した記憶がある。たとえば、前述のように二〇一八年はグレゴリオ暦二月二六日（金）が旧暦の一月一日になるため、こうした場合にはあまり混乱しない。

また現地の人びとの会話を聞いたりしていると、日付の後に「day」というベトナム語をつけていることに気がつく。「Day」は直訳では西を意味し、広く西洋というニュアンスでも捉えられる。したがって日にちの後ろに「day」をつける言動は「西暦の〇日」ということを意味する。逆に考えると、日付の後に何もつけない場合には、必然的に旧暦を指していることになろう。ここにも旧暦に依拠した日常生活が垣間見られる。

さて、二〇一六年二月末に調査した際に、旧暦二月二日（西暦二月三〇日）に遭遇した。事前に文献等で確認した範囲で、ベトナムでは旧暦一日および二五日に紙

など公的な場面ではグレゴリオ暦を使用する場合が多い。しかし、正月については、グレゴリオ暦一月一日のみが祝日になっており、旧暦の正月が盛大に祝われる。二〇一七年から二〇一八年の年末年始をみると、グレゴリオ暦の二月四日から二〇日まで（旧暦二月二九日から二月五日まで）が公的機関の正月休暇になっている（旧暦一月一日はグレゴリオ暦二月二六日）。ベトナム語の正月を意味する「tet」（厳密には「tet」は節の意。「tet Nguyen dan」が元旦節）となった場合には通常旧暦の正月を指す。

と、そちらに準拠した日付を使い出したことがあげられる。旧暦とグレゴリオ暦の日付が大きくずれている場合にはとくに問題ないが、両者の暦が数日違いであるときには非常に混乱した記憶がある。たとえば、前述のように二〇一八年はグレゴリオ暦二月二六日（金）が旧暦の一月一日になるため、こうした場合にはあまり混乱しない。

また現地の人びとの会話を聞いたりしていると、日付の後に「day」というベトナム語をつけていることに気がつく。「Day」は直訳では西を意味し、広く西洋というニュアンスでも捉えられる。したがって日にちの後ろに「day」をつける言動は「西暦の〇日」ということを意味する。逆に考えると、日付の後に何もつけない場合には、必然的に旧暦を指していることになろう。ここにも旧暦に依拠した日常生活が垣間見られる。

さて、二〇一六年二月末に調査した際に、旧暦二月二日（西暦二月三〇日）に遭遇した。事前に文献等で確認した範囲で、ベトナムでは旧暦一日および二五日に紙



11.3,000ドンのセットの内訳：ベトナムドンの紙銭。タテ5.9cmヨコ14.3cm



10.3,000ドンのセットの内訳：アメリカドルの紙銭。タテ6.3cmヨコ15cm

（VuExpress, 2016）でも銭型を刻印した黄色の紙銭「giay vang ma」と他の黄色の紙銭を明確に区別せずに記載している。こうした宗教実践には、紙銭の生産者・消費者間の認識の違いが存在する可能性や、先の金紙と銀紙を使い分けをしないことと同様に祭祀におけるシンクレッティズムがみられるとも捉えうる。この点は詳細な聞き取りが必要となる。

第二に、このセットには銀紙が含まれている点があげられる。芹澤（二〇一三）のハノイ近郊の事例では、フランス植民地時代には存在した銀紙（cf.水谷、一九四三）がみられず、金紙（ないし香港のような金銀紙）のみが流通していることが指摘されている。芹澤は二〇一〇年から二〇一二年にかけて現地調査をしたと記載している。したがって、ホーチミン市において銀紙が単体で存在する現象が時間的差異なのか、または南北という空間的相違なのか、現時点では詳らかではない。

第三に、アメリカドル紙幣が額面および

と、そちらに準拠した日付を使い出したことがあげられる。旧暦とグレゴリオ暦の日付が大きくずれている場合にはとくに問題ないが、両者の暦が数日違いであるときには非常に混乱した記憶がある。たとえば、前述のように二〇一八年はグレゴリオ暦二月二六日（金）が旧暦の一月一日になるため、こうした場合にはあまり混乱しない。

また現地の人びとの会話を聞いたりしていると、日付の後に「day」というベトナム語をつけていることに気がつく。「Day」は直訳では西を意味し、広く西洋というニュアンスでも捉えられる。したがって日にちの後ろに「day」をつける言動は「西暦の〇日」ということを意味する。逆に考えると、日付の後に何もつけない場合には、必然的に旧暦を指していることになろう。ここにも旧暦に依拠した日常生活が垣間見られる。

さて、二〇一六年二月末に調査した際に、旧暦二月二日（西暦二月三〇日）に遭遇した。事前に文献等で確認した範囲で、ベトナムでは旧暦一日および二五日に紙

絵柄が本物のそれに類似しているのに対して、ベトナムドル紙幣については、まったく異なっていることがあげられる（二〇一八年現在ベトナムにおける最も高額の紙幣は五〇〇〇〇〇ドン）。こうした相違の背景には、ベトナムにおいて実社会に流通している紙幣のコピーを禁止する方針が打ち出されたことが関係するかもしれない（Viet Nam Net, 2011）。さらに、すべてのベトナムドル紙幣には故ホーチミンが刻印されていることから、あの世の金銭とはいえ「建国の父」を燃やす行為に対して何らかの社会的・政治的な抑止作用が働いているとも考えうる。

聞き取りによれば、ベトナム南部では旧暦二日と二六日に供物をささげる習慣があるという。その他にも旧暦の正月や親族の命日、葬式などでも紙銭を供え、燃やすことがある。ベトナムではグレゴリオ暦と旧暦とが併用されている。ホテルや行政機関

ローカルな実践―紙銭の多様性



12. 供物。金紙と紙幣が同時に供えられている

銭を燃やす習慣があるとのことであった。確かにホーチミン市では、旧暦一日も含め、数日前から街中で紙銭を燃やす行為が散見されたが、二日に最も多くの供物を確認できた。聞き取りによれば、主としてベトナム北部では一日および二五日に祭祀をおこなうとのことであった。また中部では二五日のみのである。

写真12～15は、今回の調査で撮影したものである。写真12をみると、金紙と紙幣を

おける南北の分断という歴史を忘れることはできないが、人口が稠密な北部から中部をへて南部への移動の過程で漸進的な社会変化がみられことも事実であろう。今回の紙銭にみる宗教実践においてもベトナム南部における地域的特色が垣間見られた。

今後、本稿で指摘した論点を端緒として、紙銭を中心とした祭祀用品が日常生活のなかでどのように使われているのか、その利用にみるシンクレティズムの諸相を、より詳細な聞き取り調査に基づき明らかにしたい。そうすることでベトナムの社会空間にみる地域的な差異や多様性を把握してゆきたいと考えている。

文献・インターネット資料

文献

川上崇「ベトナム社会主義革命のなかの手工芸村——紅河デルタにおける木版印刷業の歴史的展開」『ベトナムの社会と文



13. 供物。左端は立体の模型。金塊を模していると考えられる



14. 供物。アメリカドルの紙銭が供えられている



15. 紙銭を燃やす風景。1区にて

模した紙銭が同時に供えられていることがわかる。写真13の金色をした立体模型は金塊と考えられる。今回観察した範囲では、立体型の冥器はこのケースともう一例しか確認できなかった。立体模型が少ない理由として、前述のように、社会主義的な政策が実施される過程で、一時的に冥具生産が禁止されることで、立体形の冥具が淘汰され、相対的に(非合法でも)生産しやすい紙製の冥具が残されてきたのかもしれない。

写真14については、「故人 nguoj mat に対する供物」であると教えてくれた。コーヒーや煙草は故人の好んだ嗜好品と考えられる。また、別のケースで実際にアメリカドルの紙銭を燃やす場面に遭遇した。話を聞いてみると、やはり「故人に対する供物」とのことであった。

おわりに

ベトナム社会を、キン(ベト)族の視座から捉えたとき、北部から南部への南進の系譜を指摘できる。ベトナム戦争に

化』三、二〇〇一年、四九—七九。
末成道男「ベトナムの文化交流の諸相」『国立歴史民俗博物館研究報告』一〇六、二〇〇三年、一九九—二〇九。
瀬川昌久「あの世の財貨——香港の紙製祭祀用品」『季刊民族学』三九、一九八七年、九四—一〇一。
芹澤知広「ベトナム・ハノイの紙銭——比較研究の試み」『国際常民文化研究叢書』三、二〇一三年、一三三—一四九。
多木浩二「ベンヤミン」複製技術時代の芸術作品『精読』岩波現代文庫、二〇〇〇年。

水谷こ吉『安南の宗教』高山書院、一九四三年。

インターネット資料

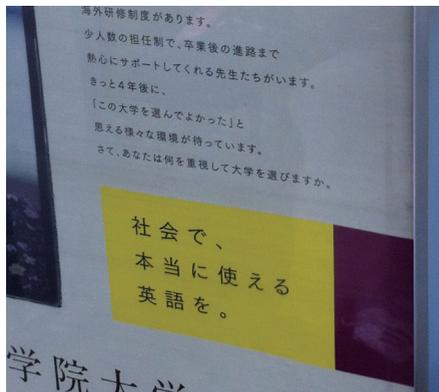
VietnamNet, <http://vietnamnet.vn/vn/doi-song/kieng-ky-thang-co-hon-chi-de-giai-quyet-van-de-tam-linh-258364.html>, 26/08/2015(閲覧日：二〇一七年一月)
Viet Nam Net, <http://vietnamnews.vn/>

society/209150/votive-money-makers-barred-from-printing-copycat-notes.html, 15/03/2011(閲覧日：二〇一七年一月)
VnExpress, <https://kinhdoanh.vnexpress.net/tin-tuc/doanh-ngiep/ban-vang-ma-dai-gia-yen-bai-thu-ve-hon-11-ty-dong-moi-thang-3445199.html>, 01/08/2016(閲覧日：二〇一七年一月)

ESSAY

英語教育サービスを販売するフィリピン

小張 順弘



大学の車内広告(東京)

に求められる能力の一つとなり、就職活動にも有利な条件となっている。大学在学中に英語力を伸ばしたいと考える学生も多く、英語コミュニケーション能力の育成は教育機関の重要課題となり、様々な英語教育プログラムが導入されている。しかし、日本では英語に触れる機会が限られているため、英語を使用する環境を自ら求めなくてはならず、英語習得に費やす時間・費用・努力などの負担が学習者に重くのしかかる。



フィリピンへ

英語を学びにフィリピンへ

日本からフィリピン行きのフライトに搭乗すると、一九九〇年代から変わらない機内の光景とともに、新たな客層が増えつつあることに気づく。南国の観光地を訪問する観光客、スーツ姿のビジネスマン、子連れで里帰りする国際結婚家族などは今でも変わらない。一方で、日本への出稼ぎを終えて帰国するエンターテイナーらしきフィリピン人は少なくなり、英語を学びに行く日本人の若者が増えた。フィリピンへ

向かう機内で英語の参考書を手にする若者の姿を目にすると、両国関係の新たな変化を感じる。

語学留学

日本では英語教育に積極的に取り組む大学や、英会話学校の車内広告を目にする機会が多い。そこには、英語を身に付けたいと考える人にとって、魅力的なフレーズが並んでいる。あらゆる分野でグローバル化が叫ばれ、「高い英語力」は幅広い職種



フィリピン留学の関連書籍

一九八〇年以降に加速した円高は、海外渡航費用の軽減をもたらし、「留学の大衆化」を促した。一ドル三六〇円時代には、政府や企業による派遣などにより経済的援助を受けることができる一部の日本人に限られていた留学は、自己負担でも可能な時代を迎えた。また、短期間で語学学習・異文化体験を目的とする留学形態も整備され、休暇を利用して気軽に参加できるようにもなった。この英語熱を背景に、日本とフィリピンは英語教育分野で新たな関係を築きつつある。

多言語社会フィリピン

フィリピンは一八四の言語があり、方言は四〇〇以上あるとされる。そのため、同じ国内でも出身地域が異なると、コミュニケーションが上手いかわらないことがある。首都マニラを中心に使用されるタガログ語を基本とするフィリピン語が国語とされ、英語も公用語として使用されている。また、日常生活の様々な場

面では現地の土着語や地域ごとの広域共通語(北ルソン島のイロカノ語、中南部ルソン島とパラワン島のタガログ語、ビサヤ諸島及びミンダナオ島のセブアノ語)が使用されている。

街を歩いてみると、いたるところに英語表記の標識や広告が目に入る。タガログ語や英語で上映される映画、英字新聞やタガログ語新聞、異なる言語で行われる教会でのミサなど、フィリピンには話者や話題に応じて最もふさわしい言語が選択され、



英語の巨大広告がひしめき合う街中(マニラ)



大学内に併設された英語学校(セブ)



海沿いにあるリゾート型英語学校(セブ)

SCHEDULE OF MASSES

SUNDAYS & HOLIDAYS OF OBLIGATION		VENING
MORNING		Cebuano
5:30 Cebuano		Cebuano
7:00 Cebuano		English
8:30 English		7:00 English
10:00 Cebuano		
11:30 English		
WEEKDAYS MASSES		WEEKDAYS DEVOTIONS
MORNING	WEDNESDAY	SATURDAY
6:00 Cebuano	7:00 AM Novena	5:00 PM Our Lady of Lourdes
7:00 Cebuano	Mass-Perpetual Help	
8:00 English	5:00 PM Novena/Benediction	
	Mass Perpetual Help	
AFTERNOON		
5:30 English		
CONFESSIONS WEEKDAYS		CONFESSIONS FRIDAYS
TUE - SAT	8:00 AM - 12:00 NN	
4:00 - 5:20 PM	3:00 PM - 7:00 PM	

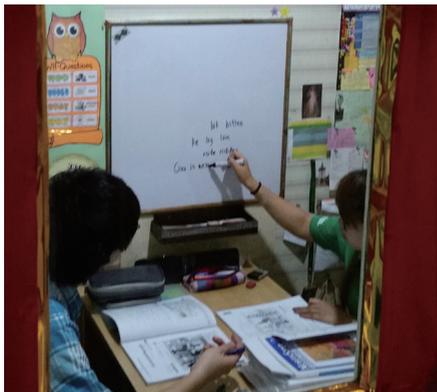
セブのサントニーニョ教会内の言語別ミサ予定表



セブのサントニーニョ教会



街中に日本語で表示されている英語学校の看板(セブ)



一畳程度の教室でのマンツーマン授業(セブ)

英語学校の環境
 フィリピンに持ち込まれた韓国式英語教育は日本人学習者の間でも評判となり、事業拡大のために日本市場にも積極

二〇一七年時点で、フィリピンの英語学校は四〇〇から五〇〇校程度存在し、その半数がセブ島にある。観光地のイメージもあるためか、日本からフィリピンへ四万人近く(二〇一五年)の英語学習者が訪れている。

同じ空間で複数の言語が日常的に使用される多言語状況が存在している。

フィリピンの略史
 このようなフィリピンの多言語状況は、七〇〇以上の島々からなる国土と各地域の地域文化の存在、近隣諸国との交易、スペイン・アメリカ・日本による植民地支配の影響など、その歴史背景が色濃く社会の中に反映され、言語生活にも強い影響を与えた。多くの土着言語には、スペイン語由来の単語が残っている。また、アメリカ植民地時代に行政言語、公教育の教育言語であった英語は、フィリピン社会の中に深く根を下ろし、行政・教育・ビジネス・メディア分野で頻繁に使用されている。

フィリピン人にとっての英語は、「支配者言語」「強制された言語」という側面もあるが、国家独立を遂げた現在では「自分たちの英語」という意識が高まりつつある。植民地時代の「負の遺産」という意識は薄れつつあり、より豊かな生活を約

束してくれる言語として受け止められている。アメリカ文化の影響を強く受けているフィリピン人の振る舞いは、時として近隣のアジア諸国の人々から「褐色のアメリカ人(Brown American)」と揶揄されることもあるが、フィリピン人の高い英語力が世界の労働市場での活躍を促す要因として「海外出稼ぎ」を支えていることは間違いない。

フィリピンの英語学校
 フィリピン人の英語力は新たな英語教育ビジネスを生み出し、成長を続ける観光教育産業として期待が寄せられている。一九九〇年代に韓国系英語学校の設立が相次ぎ、韓国入学生がフィリピンで効率的に英語学習に取り組むことができる仕組みが構築された。その特徴には「マンツーマン授業」「格安」「英語以外使用禁止(EOP = English Only Policy)」「リゾート体験」があり、フィリピンは英語留学先の選択肢の一つとなった。

他の「フィリピンまで来て基本的な英語や英文法を学ぶ必要があるのか疑問に感じた」、「授業では終始おしゃべりを感じただけが残った」、「せっかく現地滞在しているのに現地の生活に触れる機会が失われて

「格安での英語留学」、一週間から参加できる「短期留学」、効果的な「マンツーマン授業」、食事や洗濯サービス付きの「快適な滞在環境」、大自然を満喫できる「リゾート体験」、さらには転職者や企業研修者の「社会人留学」、高齢者向けの「シニア留学」、子供連れの「親子留学」などの魅力的な表現とともに日本の幅広い学習者層に向けて紹介されるようになった。

また、大きなキャンパスを持ち、寮や売店を併設する英語学校では、施設が充実しており、外出せずに快適に滞在を続けることができる。現地の治安状況に懸念が残るため、英語学校は学生の安全面への配慮を欠かさず、事件・事故防止を徹底している。そのため、フィリピン社会から意識的に距離を置く学校運営が一般的となっている。

実際にフィリピンで英語を学んだ経験のある大学生に、参加後の感想を聞いてみた。「マンツーマン授業を心配していたが充実した英語の勉強ができた」、「フィリピンの先生は親しみやすかった」、「個人的ニーズに対応してくれる授業をしてくれた」、「ゲームなどを取り入れて楽しく学べた」などの肯定的なものが多い。

「格安での英語留学」、一週間から参加できる「短期留学」、効果的な「マンツーマン授業」、食事や洗濯サービス付きの「快適な滞在環境」、大自然を満喫できる「リゾート体験」、さらには転職者や企業研修者の「社会人留学」、高齢者向けの「シニア留学」、子供連れの「親子留学」などの魅力的な表現とともに日本の幅広い学習者層に向けて紹介されるようになった。

欧米英語圏に比べて費用が半額以下の「格安での英語留学」、一週間から参加できる「短期留学」、効果的な「マンツーマン授業」、食事や洗濯サービス付きの「快適な滞在環境」、大自然を満喫できる「リゾート体験」、さらには転職者や企業研修者の「社会人留学」、高齢者向けの「シニア留学」、子供連れの「親子留学」などの魅力的な表現とともに日本の幅広い学習者層に向けて紹介されるようになった。



セブ島ビーチリゾート風景

いるように感じた」という感想もあった。

費用対効果を求める英語留学

商品売買には「売り手」と「買い手」が存在し、商品価値の変動を伴った需要と供給のバランス市場が形成される。高額なイメージがある英語留学に対して、フィリピン留学は費用対効果の高さを強みとして導入された。これにより、一定の英語学習者にとっては、「魅力的な商品」として捉えられたのである。



英語学校内のCanteenと呼ばれる3食提供される食堂(セブ)



英語学校の自習室の様子(セブ)



セブの市場の様子



セブの様子



英語学校内にあるジム設備(セブ)



英語学校の寮の3人部屋(セブ)

語学教育のあり方については、多くの研究や実践的な取り組みがされ、効果的な学習法や教授法の模索が続いている。しかし、言語習得は容易ではなく、長い時間や努力を要するものである。「ことばの教育」に関心を寄せる一人としては、フィリピン留学のきわめて「商業的な側面」と「その商業的側面が学習者に与える影響」が気になる。「途上国の人件費の安さ」と「ノンネイティブ英語」を利用した語学ビジネスモデルは、英語学習者にどのような影響をもたらすのであろうか。

「フィリピン留学」のファミレス化？

フィリピン留学には、フィリピン社会から切り離された英語と、留学をより魅力的にする要素をパッケージ化したサービスという性質がある。その販売戦略は外食産業の代表であるファミリレストラン（ファミレス）の特徴によく似ている。ファミレスの「安い」「早い」「うまい(旨い)」という

特徴は、フィリピン留学の「安い(留学費用)」「早い(英語修得)」「うまい(上手い)教育方法、おもしろい(ゾート体験)」という魅力に当てはまる。

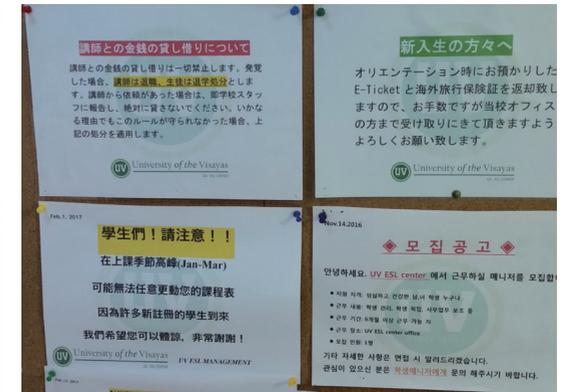
例えば、学習者の個別ニーズに対応する授業料の安い「マンツーマン授業」のフィリピン人講師は、利用客の注文に対して比較的値段の安い食事を個別に提供するファミレスの店員に似ている。また、「本場の英語」「ネイティブ英語」ではないフィリピンの「ノンネイティブ英語」による授業は、本格派料理の代わりに冷凍食品を提供しているかのようでもある。そして、その料理はTOEIC、TOEFL、IELTSなどの品質保証が伴い、学習者に提供されている。もちろん、本格派、冷凍のどちらも食品であり、栄養が取れていることに違いはない。日本のファミレスの歴史を振り返ると、一九七〇年代に創成期を迎え、一九八〇年代の黄金期、一九九〇年代以降の変革期と続き、低価格競争が激化する。二〇〇〇年代以降、日常化したファ



英語学校内の3食の日替わりメニュー表(マニラ)



英語学校のグループレッスン(マニラ)



日本語、中国語、韓国語で書かれている英語学校内の掲示板(セブ)



マンツーマン授業を行うCubicleと呼ばれる間仕切りされた授業スペース(マニラ)



マニラ



マニラ空港

ミレスは、専門食化（寿司・中華・イタリアン・ステーキなど）により外食市場での生き残り戦略を打ち出していった。フィリピン留学が、必ずしもファミレスと同じ歴史をたどるということではない。しかし、サービス産業という共通点を見ると、需要と供給のバランスの変化とともに、フィリピン留学の質と量が変わっていくことは確かである。つまり、日本の学習者が何を求めてフィリピンを留学先を選ぶのか、フィリピンが学習者に何を提供できるかが、今後の動向に大きな影響を与えることになる。

これからの英語教育

日本では早期英語教育の導入（小学校教科化）、英語スピーキング能力の測定を含む大学入試制度改革など、大きな教育改革期を迎えようとしている。有名私立中学の入試には英語試験の導入を始めたところもある。駅前留学、お茶の間留学、ネット留学、eラーニングなどの英

語学習モデルが、学習者の利便性向上と通信技術の発達を背景に誕生してきた。さらに低価格・高品質の英語教育サービスが求められる中で、フィリピン留学やオンライン英会話（フィリピン人講師による授業）が登場した。部分的ではあるが、日本の公的教育機関での導入も開始されている。フィリピン発の英語教育は、英語学習に幅広い選択肢を与え、日本社会においても英語を使用する場をますます拡大させるだろう。

高まる英語熱による言語環境の変化は、英語が苦手な学習者が抱く「英語ができないことで将来何らかの不利を被るかもしれない」という焦りをかき立てるものになる。そう考えると、フィリピン留学がこの不安の受け皿としての役割を担っているのかもしれない。しかし、この英語留学モデルに含まれている「社会から切り離された英語」「商品（モノ）としての英語」「市場原理に影響される語学習得」「言語知識・技術への偏



マンツーマン授業の様子(マニラ)



英語学校の寮の3人部屋(マニラ)



貧困の現実(セブ)



マニラ下町の様子

重傾向」は、どこまで学習者の本質的な「ことば」の習得に込めることができるのか、少し立ち止まって考える必要があるだろう。

「学びの本質」は決して市場原理に基づくものではない。また、英語検定などで示される「知識・技術の習得」だけにあるのではない。人と人を繋げる「ことば」の学びは、人との関わりあいの中で「学び方を学ぶ」ことであり、その力が「ことば」「話者」「社会」「文化」へのつながりを切り開いていく。「学び」自体が手軽な「パッケージ商品」として売買される傾向が強い現在、消費者である学習者は何をどのようにして選ぶのだろうか。私たちは「ことば」と向き合い、その利用目的と意味を賢く見極め、「ことばの学び方」を選択していくことが求められる時代を迎えているようである。



2. ブダペスト彫塑公園のレーニン像

右手を挙げるのは、銅像の定番ポーズである（写真1）。かつて社会主義国の至るところに立っていたレーニン像は、右手を挙げているものが多い（写真2）。毛沢東像にはいくつもの種類があ



3. 撫順の毛沢東像

るが、そのうちの 하나가右手を挙げるポーズである（写真3）。韓国の独立運動家、金九（一八七六〜一九四九）の像も右手を挙げている（写真4）。日本において右手を挙げる銅像といえ



5. 札幌のクラーク像



4. ソウルの金九像

ば、札幌のクラーク像が有名である（写真5）。ウィリアム・クラーク（一八二六〜一八八六）は、アメリカのマサチューセッツ州に生まれ、南北戦争に参加した後、新設のマサチューセツ

右手を挙げる人

高山陽子

A BRONZE STATUE STORY



1. ニューヨークの自由の女神像

情で座っている。例えば、魯迅の像は上海や杭州などにあるが、大半は座っているものである（写真8）。

さて、幕末から明治の時代を生きた実業家、岩崎弥太郎（一八三五〜一八八五）の銅像は、高知県安芸市と長崎県高島にある。高島は、二〇一五年に世界遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の一資産である。高島炭坑は幕末に佐賀藩とスコットランド人商人のグラバー（一八三八〜一九一一）によって開発された海底炭坑である。明治維新後、グラバー商会は破綻し、高島炭坑は、一八七四年に後藤象二郎に払い下げられた。その後、後藤による高島炭坑の経営も悪化し、福沢諭吉の説得を経て、一八八一年、弥太郎が高島炭坑を買い取った。弥太郎は、経験者と技術者を高島に集め、積極的に炭坑開発を行った。一八九〇年、旧佐賀藩主の鍋島孫六郎から端島を買収した。これらの海底炭坑の経営は三菱に莫大な利益を



8. 杭州の魯迅像

もたらした。弥太郎は一八九三年、三菱合資会社を設立し、三菱財閥の基礎を築いた。

「軍艦島」の名前で知られる端島は、その形が軍艦、土佐に似ていることに因

む。独特の外見は国内外の人びとの関心を集め、007シリーズ『スカイフォール』（二〇一二年公開）では、敵役シルヴァが潜伏する場所として登場した。実際の端島は立ち入り区域が限定されているため、島内部の撮影は別の場所で行われ、島は外観のみが使用された。映画の中で、ボンドガールのセヴリンはボンドを島に連れて行った後、シルヴァに捕えられる。彼女は、倒された巨大な石像に縛られる。その石造はかつての独裁者のものという設定で、やはり右手を挙げている。

最盛期の端島には、五〇〇〇人以上の炭鉱労働者とその家族が住んだが、戦後、主要燃料が石炭から石油へ変わったため、一九七四年、端島炭鉱は閉鎖され、全島民が島を離れた。その後、三〇年間、波と風にさらされ、島は現在のような廃墟となった。

高島に弥太郎像が建てられたのは、閉山から二〇年以上たった二〇〇五年であ

農科大学に就任した。第三代学長となつてから、明治政府に呼ばれて一八七六年に来日した。実は、クラークが札幌農学校の初代教頭として働いた期間はわずか八か月であり、一八七七年には故郷へ帰った。

ローマにあるネルウァ像のように、



6. ローマのネルウァ像

ローマ皇帝はしばしば右手を挙げている（写真6）。ローマ皇帝に留まらず、騎馬上で右手を挙げる王侯貴族の像も少なくない（写真7）。ヴィットーリオ・エマヌエーレ二世は、一八六一年、イタリア王国の初代国王となった。イタリア各地に彼の騎馬像があるが、すべての彼の



7. ジェノヴァのヴィットーリオ・エマヌエーレ2世像

銅像が右手を挙げているわけではない。近現代の歴史上の人物に目を向けてみると、レーニンや毛沢東、金九のように、激動の時代を生きた運動家や政治家が右手を挙げているのが目立つ。同じ時代に生きた人物でも、教育者や学者、芸術家は右手を挙げることはなく、物憂げな表

る(写真9)。この時期、高島町が長崎市と合併し、端島炭坑や高島炭坑の保存運動、さらに、世界遺産登録活動が始まった。二〇〇九年に「九州・山口の近代化産業遺産群」として世界遺産暫定リストに記載され、先に世界遺産委員会に推薦される予定であった「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」を抜いて、世界遺産に登録された。

もう一つの弥太郎像は、出身地の高知県安芸市にある(写真10)。地元では「弥太郎さん」と呼ばれている。弥太郎の生誕一五〇年を記念して、一九八六年、地元の団体と三菱グループが寄付金を集めて安芸市に建立した。浜田浩造に



9. 高島の岩崎弥太郎像

激動の時代の躍動感を表すのに適していたから、である。ただし、ここで浮かぶ疑問は、なぜ右手なのか、という点である。もしモデルとなる運動家が左利きだったら、左手を挙げる銅像が作られたのだろうか。

そこで思い出されるのが、ロベール・エルツ(一八八二〜一九一五)の「右手の優越―宗教的両極性の研究―」(一九〇九年)という論文である。エルツは、フランスの民族学者・社会学者として将来を嘱望されていたが、第一次世界大戦中、東部戦線のマルシェビルにおいて戦死してしまい、この論考を展開させることができなかった。

エルツによると、多くの社会において右手は聖なるもの、左手は俗なるものと見なされてきた。その理由は、左脳が発達しているから人間は右利きになるということではなく、人間が右利きになった結果、左脳が発達したのだという。この点に関しては、現在では様々な分野で明



10. 安芸の岩崎弥太郎像

る銅像は、安芸市江ノ川上公園に置かれた。銅像の高さは三・三メートル、台座を含めると高さ五メートルになる。二〇一五年、弥太郎像は江ノ川上公園近くに移築された。高島の弥太郎像は財閥創始者の堂々たる姿が表現されているのに対して、安芸の弥太郎像はちよつと控えめに腕を挙げている。

控えめな感じが全くないのは、南魚沼市の田中角栄(一九一八〜一九九三)の銅像である(写真11)。一九八五年に建立されたこの銅像は、昭和の政治家らしい雰囲気を持つ。そして、この銅像の特

らかになっている。右利きが好まれ、左利きがタブーとされてきたのは文化的慣習である。そして、親が子どもへの利き手を左から右へ矯正するのは、こうした慣習上の理由だけではなく、自動改札などが右利きを前提に作られているためである。最近では左利きのネガティブな印象が薄れ、「両利きは天才」という言説まで広まりつつあるが、やはり、子どもが左利きになるのを好まない年配者は少なくない。

レオナルド・ダ・ヴィンチは「両利きの天才」である。彼の銅像はどうなっているのか。実は、魯迅と同様、芸術家のポーズは基本的に物憂げに立っているだ



12. ミラノのダ・ヴィンチ像



11. 南魚沼の田中角栄像

異なる点は、雪よけの屋根がついていることである。田中真紀子氏が「銅像が雪ざらしになってかわいそう」といったことで屋根が設置された。二〇〇五年一〇月五日の屋根の除幕式はテレビでも報道された。この銅像については、田中角栄への個人崇拜が見られるとして批判が絶えない。一政治家の銅像そのものへの批判もあるが、高い台座の上で右手を挙げて「偉そう」にしていることも、この銅像への批判を強めている。

運動家や政治家の銅像は、なぜ右手を挙げているのか。単純に答えるならば、けである(写真12)。では、両手を挙げた銅像はどんなものだろうか。残念なことには、両手を挙げた銅像は「天才」には見えない(写真13、写真14)。エルツの指摘の通り、右手は権力の象徴であるため、右手を挙げる銅像が好まれてきたのだろう。それは安定感のあるポーズなのである。



13. ブダペスト彫塑公園の像



14. 長春の男性像



全体発表の司会を務めるゼミ生



2017年のセミナー合宿参加者と教員

ゼミナール
紹介

Seminar
introduction

太田ゼミ

「日本からEUを理解する

～第6回 EUセミナー参加記録～」

太田 瑞希子

国際関係学科太田ゼミは国際金融をベースとしてEU経済論を学ぶゼミである。国際関係学科では、経済・ビジネスコース、平和政策コース、国際協力コースから一つを一年次に選択登録し、卒業まで同コースの開講科目を中心に履修することで学生自身の関心に沿った体系的な学習ができるようカリキュラムを設計している。一方で、他コースの科目履修は自由であるため、本ゼミにも一年次から経済・金融やEUに関する知識を積みあげてきた学生と、一・二次に経済関連科目を履修していないが途中から経済を学びたいと考えるようになった学生が混在することとなる。全員が三年生の四月にゼミとして集合してから四年生の一二月の卒業論文提出までの二〇ヶ月という限られた時間で、経済の基礎知識と理論の習得から卒業論文という学生生活の集大成を仕上げなければならない。

加えて、各国経済・ユーロ圏経済・EU経済という三層構造を持つEUを論

じるためには、各国の政治経済および歴史という第一層、通貨・為替制度の理論と歴史、欧州中央銀行の金融政策などの第二層、地域貿易協定(RTAs)、貿易政策、構造問題などの第三層、そして日・米経済に至るまでと、前提として必要とされる知識は幅広い。

三年四月からEU経済に関するテキストの輪読と発表から始めるが、三年後期には卒論のテーマの絞り込みを行い、資料収集を開始しなければ四年前期中盤の中間提出(卒業論文の一部を提出すること)で卒論提出の申請を行う国際関係学科独自の制度。これを提出しない場合には原則留年となる)には間に合わない。そこで当ゼミでは、卒論の最終提出の二ヶ月半前に参加するEUセミナーまでに卒論を仕上げつつ、同セミナーで修正のための追加知識を補うという方式を採用している。

EUセミナーは毎年九月に八王子の大学セミナーハウスで開催され、EU統合



駐日EU大使による特別講演に聴き入る学生達

の学生を中心に七〇名超である。

テーマの理解が浅い場合や事前に通達されている課題を十分にこなしていない場合は議論から取り残されること、また中間報告や最終報告では分科会毎に全参加者と講師の前でプレゼンテーションを行い質疑応答もこなすことが要求される。テーマと事前課題が発表される春先から準備を始め、夏期休暇中も何度も集合して資料収集および報告準備を行う。

関連ファイルは全てクラウドのゼミフォルダにアップするため、教員にも準備状況は筒抜けである。行き詰まっているようであれば、コメントを入れたり別な資料のヒントを与えたり、と自主性を重んじつつ、教員は付かず離れず見守る。この過程を通じて当ゼミの学生の約半数が分科会テーマと自身の卒論テーマとを関連づけた視点から調査するようになり、セミナーの開始までに自身の卒論に足りない要素は何か、分科会の講師から何を学びとりたいのかを整理しておくように

なる。

EUセミナー初日は講師全員から各分科会ごとに回答すべき課題が提示され、その後分科会討論へと進む。分科会討論は、セミナー全体のプログラムの核を成すもので、初日は事前課題の発表を行う。参加者や講師からのコメントや質問が続き、どの分科会も二三時頃まで議論が続く。

二日目も分科会討論からスタートし、夕方の全体会での中間発表に向けて、構成を固め不足資料を補充する作業を分担して行う。午後は発表資料の作成と発表リハーサルを行い中間発表へと流れ込むのだが、集合してから一日足らずということもあり、実際には議論が不十分なまま全体会で発表する分科会がほとんどである。それは講師が指摘せずとも学生たち自身が実感するようで、実はここからがセミナーの本番ともいえる密度の濃い学習時間となるのである。

夕食後の分科会一五〇分、そして翌三

に関するテーマについてEU研究の各分野の第一人者を講師として、経済・金融、社会、法といった分科会毎のテーマに沿って三日間にわたり徹底的に議論と分析を重ねる研究セミナー合宿であり、当ゼミは毎年参加している。二〇一七年はイギリスのEU離脱や移民・難民問題という大テーマの下、「イギリスのEU離脱にともなう単一市場・関税同盟アクセス」、「中・東欧諸国の成功ゆえの反動」、「EUの民主的ガバナンスと市民社会」、「ヨーロッパのポピュリズム」をテーマとする各分科会に、学生はそれぞれ自分の関心に沿って登録した。ちなみに当ゼミでは卒業論文のテーマは「EU」または「経済」のどちらかをキーワードとするものであれば良いというルールにしているため、毎年幅広いテーマが出揃うこととなり、学生は各分科会にバランス良く散らばる。参加者は当ゼミのほか一橋大学、早稲田大学、東京外国語大学、立教大学、立正大学など



各国旗が翻るアントワープ市庁舎

国際関係学部の「今」がわかる

国際関係学部BLOG 更新中!



亜細亜大学 BLOG 検索

国際関係学部BLOGとは?

グローバル化時代を迎え、国際関係学部の研究・教育活動は日々変化しています。そうした「今」を発信すべく2013年3月に当ブログはスタートしました。

タイムリーな発信に力を入れています!

国内外のフィールドワークやインターンシップ、ゼミ活動など、学生の経験を熱いうちに情報発信することで臨場感を伝えます。

今後にもご期待ください!

国際関係学部により関心を持ってもらうため、今後も学部独自の取り組みを紹介していきます。



視覚にうったえたい!

文字情報だけでなく、写真を多く用い、学部の教育活動をイキイキと伝えられるよう留意しています。

実は…更新しているのは教員です!

学部教員が持ち回りで更新をしています。

ブログへのアクセスはこちらから

Check!

<http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/blog/>

Seminar introduction

日目の午前の分科会一五〇分で構成の大幅な練り直し、講師に指摘されたポイントの修正、追加資料の収集、そして最終発表の準備を行わなければならないため時間との勝負になる。二日目の夜には意見交換会という名の懇親会があるのだが、学生は夜遅くまで楽しく語らうだろうという講師陣の予測を裏切って、学生達が歓談もそこに切羽詰まった表情で分科会会場に戻っていったのでこっそり様子を覗きに行ったところ、真剣に議論を闘わせる姿があった。限られた発表時間のなかで内容に深みを持たせるには情報の取捨選択が肝心であると学生自ら気づいたのは二三時頃、さらなる資料やアドバイスの提供を行い講師は二四時に引き上げたが、後から聞いたところでは午前三時頃まで作業をしたとのことであった。



欧州の冬の風物詩クリスマスマーケット

全くレベルの違う発表となった。修了証を受け取り帰宅の途に着く頃にはみな疲労で無言であるが、同時にここで得た知識を卒論に反映すべく、セミナー前よりも活発にクラウド上の卒業論文ファイルが更新されていくことになる。卒論に向けた知識の蓄積を十分に行っていればセミナーでの多岐にわたる議論を理解でき、卒論に欠けた情報をセミナーで補充すれば卒論のレベルが上がるという相互作用を四年生は実感するようで、卒論が大学生活で最も楽しかったと口にする。その言葉こそ指導教員冥利に尽きるものである。



特別講演のヴィオレル・イスティョアイア=ブドゥラ駐日EU大使、講師陣と学生

ゼミナール 課外活動

国際関係学科 荒井ゼミ

海外合宿・IBインカレ

荒井 将志

一. はじめに

一般的に、この一五年ほどの間、新興国の急成長とグローバル競争が進み、企業や社会が大学生に求める能力は変わり続けている。また、大学の教育環境も変わり、インターネットの普及によって、もはや教室に來なくともパソコンやスマホで授業や試験が受けられるということさえ起きている。さらに言えば、知識は、大学に行かなくとも、インターネットで検索すれば、誰でも低コストでどこでも入手可能になってしまった。

大学教育の意義が問われる中、注目すべきはゼミである。大学における大教室での授業では、いくら双方向性を大切にしたりとしても、やはり教員から学生への一方通行的な知識の移転になりがちである。学生は受け身になってしまう。他方ゼミは、教員とゼミ生たちが、教室で膝を突き合わせて、時間をかけて事象の因果関係やその問題の本質を議論し、批判し、可能性を検討する、まさに「主体的

な知識創造の場」なのである。このゼミにおける知的相互作用こそが、学生にとって唯一無二の学びとなる。実は、このような日本のゼミ・システムは、世界的にも稀であり、日本の大学教育におけるひとつの優位性であるといえる。

二. ゼミの活動

今回は、国際関係学部国際関係学科の私の「専門ゼミ」（荒井ゼミ）の活動について紹介させていただきたい。

拙ゼミの専門は、多国籍企業の国際経営戦略論である。特に、社会から亜細亜大学国際関係学部の人材に期待されていることは、アジアへの深い理解であると考えられるので、「日本企業のアジア戦略」をゼミテーマの中心に据え、今日的な課題を見出し、考えている。

ゼミの目標は、一二月に開催される「IBインカレ」（国際ビジネス研究インターカレッジ大会）へチームで論文を作成することである。そこへ向けて、ゼミ

では、インプットとアウトプットをバランスよく行うことを考えている。

毎週のゼミ活動こそが研究の基本であるが、今回はアウトプットの機会について紹介させていただきたい。

海外討論会

（二〇一七年九月一日～一六日）

前期のインプット期間を終えたゼミ生にとって最初のアウトプット機会は、夏の海外討論会である。二〇一七年度の夏は、タイのバンコクにあるシーナカリン・ウィロート大学（S.W.U.）を訪問した。ここは亜細亜大学との提携校でもある。ちなみに、二〇一六年度はベトナムのホーチミンにあるFPT大学を訪問した。

S.W.Uとのプログラムは、午前中、日本語学科の学生との日本語による文化交流会が行われた。双方が予め準備してきた、伝統的玩具やお菓子などを紹介し合い、大変盛況であった。



午後は、メイン・イベントとなる経営学部の学生との英語による国際経営に関する研究発表と質疑応答が行われた。会場には一〇〇人以上の学生が集まってくれた。荒井ゼミからは三チームが発表された。たくさんさんの質問が挙がり、活発な討論会となった。

バンコク五泊六日の滞在期間中には、日系企業の海外子会社の工場見学やJETROにも訪問し、リアルな海外ビジネスについて学ぶことができた。また、世界遺産であるアユタヤや、バンコク市内の王宮も訪れ、タイ文化への理解を深めた。

四大学合同ゼミ
(二〇一七年一〇月二二日)

後期が始まると、IBインカレへ参加できるチーム数が二つであるため、ゼミ内では、三チームを二チームに絞るコンペティションが行われた。敗退した一チームは他の二チームに吸収されるというもの





行う知識移転による効果の検証」とのテーマで発表し、プレゼン賞を受賞した。こうして二チームとも強豪校を退けて受賞できたことは、ゼミが高いレベルであったことに他ならない。ゼミ生がその高いレベルに至ったのは、四月からの約八ヶ月間、モチベーションを保ちながら、努力と切磋琢磨を続けてきたからである。



である。これは、組織に大きなコンフリクトを生み出すこととなったが、後に強い結束力を生み出すきっかけとなった。二チームに再編成されてから初めての発表の場は、四大学合同ゼミである。これは、亜細亜大学の拙ゼミの他、立正大学、愛知大学、静岡県立大学のゼミによる合同ゼミである。昨年度は亜細亜大学で開催したが、今年度は愛知大学にて開催された。一泊二日で名古屋に行った。IBインカレの論文は、英語または日本語での執筆が選べるのだが、ゼミ生は緻密な論理展開を優先し、あえて日本語で書くことを決めていた。そのため、タイとは異なり、日本語でのプレゼンテーションとなった。

IBインカレ(二〇一七年二月九日)

論文の提出は、一月一五日が締め切りであった。ゼミ生は、毎日二時まで図書館で論文を作成し、ギリギリまで諦めずに作業をして、無事に提出を終えた。約三週間の論文の審査の間、学生はプレゼンの準備や質問対策に追われた。この間のあるゼミの日、ゼミ生全員がスーツでやってきたので、何かと聞いたら、IBインカレ当日さながらにリハールをしたいからスーツを着てきたというのである。この意気込みには、とても驚かされた。もはや担当教員の私ですら、なぜ彼ら彼女らがこんなに真剣に頑張れるのか不思議に思うほどであった。二月九日、IBインカレの会場である慶應義塾大学には、一三大学一五ゼミ二九チームが集まり、オブザーバーなどを含めると三〇〇人ほどの学生が集まった。教員も三〇名ほどが参加した。

荒井ゼミAチームは、「日系中小企業におけるオープンイノベーションの特許の価値に与える効果の実証分析」とのテーマで発表し、総合六位(日本語部門最優秀賞)の成績を収めた。Bチームも「日系多国籍サービス業における長期経営のためのナレッジ・マネジメント」F D Iで



中東、内戦で破壊されたパルミラの記念門の復元



ラテンアメリカ、色鮮やかなグアナファトの街並と死者の日の飾りつけ



東南アジア、カキリマと多文化市場



南アジア、ガネーシャ像と食文化、イスの上にはインド映画案内

四回目の参加となる今年のテーマは、「多文化トラベル2017」であった。中国の天安門広場、韓国の北村韓屋村(プッチョンハノクマウル)、メキシコのグアナファト、シリアのパルミラ遺跡、インドネシアの移動式屋台カキリマ、インドのナンとカレーなどの展示を通して現代における多文化的な旅とは何

かを楽しく理解させることを目指した企画であった。もちろん毎回来訪者の好評を博している「名前で多文化」(学科で開設している六つの地域言語の中で独特の文字体系を持つ韓国語、ヒンディー語、アラビア語で名前を書くサービス)や六地域の挨拶をハンコで押す「ハンコで多文化」も実施した。



会場全景、天安門広場から旅がスタート



5号館4階の案内、報告会も同時開催

学部行事報告

多文化コミュニケーション学科アジア祭
参加企画「多文化トラベル2017」
展示部門優秀賞に輝く

新妻仁一



韓国の北村韓屋村

とだろう。呼びかけに応じてくれた八人のメンバーが集まり、最初の実行委員会が開催されたのが、五月であった。その後アジア祭参加のための全学的な説明会への出席、テーマ設定と具体的な日程の確認、六回に及んだ実行委員会の中で明らかになった課題への対応と新たな実行方針の確定、こうしてアジア祭当日まで各地域の展示内容について検討が重ねられた。これまでのように毎回各地域言語から代表者が集い、設



廊下では学科の活動と地域言語を紹介



お面の作成、集中力が勝負



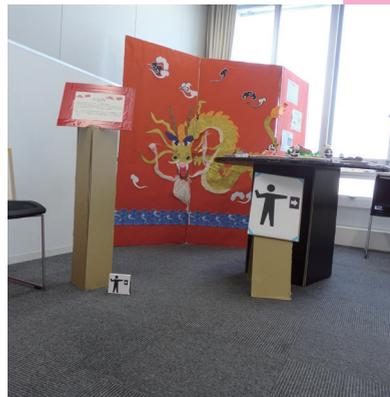
好評だった「名前で多文化」と「お面で多文化」

定テーマに従って展示物を作成するという方式は、その年度の言語履修者数や履修生の問題意識の違いによっては困難な場合があることが徐々に明らかになってきた。この問題を克服するには、今回のようにこれまで作成した展示物を新しい視点から見直すことによって再利用することが重要になるであろう。最終日、後夜祭に出席した実行委員から嬉しい知らせが届いた。「多文化トラベル二〇二七」が展示部門の優秀賞に輝いたのである。企画内容、接客態度、展示方法、クオリティという四選考基準を来訪者投票によって総合的に評価された結果であった。空き時間や六限の時間帯を使って会議を重ねた実行委員はもちろん、展示物の試作、そして今年はいつよりも一日長い四日間となった開催期間中に実行委員からの要請に従って協力を申し出てくれた学生たちにとってこの結果は、大きな喜びと達成感を感じさせるものであった。

そして新たな企画として「お面で多文化」を試みた。楊貴妃(中国)、世宗(韓国)、ホセ・リサルル(フィリピン)、ガンジー(インド)、カストロ(キューバ)ツタンカーメン(エジプト)など各地域の歴史的人物のお面を作成し、来訪者は、それをつけて記念写真を撮ることができ、実際の人物になった気分での地域の文化や歴史に対する関心を広げることができるというものである。今年度の特徴は、多文化トラベルが内包する様々な文化的側面に注目するという意味で、二〇二四年の「多文化マーケット」に始まり、五年の「多文化フェス二〇二五」昨年の「のぞきみ！多文化きっちん」とこれまで三回の参加を通じて作成した展示物を再利用したことである。例えば中国の天安門広場の横には、多文化フェスや多文化きっちんで作成した春節の屏風と食卓を配置した。伝統的マーケット、そして祭りや食文化、来訪者は、展示の中に組み入れられた小ささまざまな物から旅先で喚起される感性の多様さに気が付いたこ



優秀賞に輝く



初登場のピクトグラム、次の旅先を教えてください



「屋台で多文化」のコーナー



天安門を試作してみる

多文化コミュニケーション学科は二〇二二年の学科設立以来、多文化パスポート(学習成果記録帳)を新入生に配布し、学内外の活動に積極的に参加することを促してきた(写真1)。多文化パスポートには、学



1.多文化パスポート

学科FD活動報告

多文化パスポートの利用促進

高山陽子

生の活動に応じて、一点・二点・五点・二〇点のシールを貼っている。
短期・長期の海外留学、インターンシップ、フィールドスタディー(写真2)、アジア祭学実行委員(写真3)、地域言語検定上級(写真4)などは二〇点シール、短期のボラン



2.10点シール

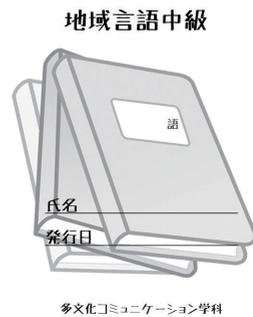


3.アジア祭シール2016

ティアや地域言語中級単位取得や各種の検定合格は二点(写真5)または五点シ



4.地域言語上級検定



5.2点シール

ル、一年次のオリゼミ(オリエンテーションゼミ)の活動は一点シールとなっている。

学生が集めた各種のシールに対して、三年前期の合同ゼミで中間表彰、卒業式の学位授与式で最終表彰を行っている。これまで一〇〇点近くのシールを集めた学生がいる一方で、多文化パスポートおよび課外活動にあまり興味を示さない学生もいた。そこで、二〇一七年度のFDグループ研究「多文化パスポートの積極的活用方法の検討」で、この課題に取り組んできた。

本年度のFD活動内容を紹介する前



6.東北パスポート(左)と竜馬パスポート(右)

に、多文化パスポートが作成されるまでの過程を述べたい。

多文化パスポートを作成する上で参考にしたのが、観光地で見られるパスポート風の冊子と納経帳である(写真6)。

日本で納経帳といえば、一般的に四国遍路のものを指す(写真7)。四国遍路は、八十八箇所の寺院を巡る日本最大の巡礼地である。弘法大師ゆかりの寺院を回る巡礼は古くから庶民の信仰を集め、一七世紀

スなどの合同ゼミのたびに一点シールを貼っていった。多文化パスポートを忘れる学生もいたため、シールを貼る負担がオリゼミ担当の教員に重くのしかかった。これを解決するため、オリゼミの活動をあらかじめ多文化パスポートのページに印刷する解決法を取った。

第三の問題は、学生が多文化パスポートを重視しないことであった。一年次にはシールを貼る機会が多いため、学生はゼミの際に多文化パスポートを持参したが、三年になるとシールを貼る機会が減少するため、紛失してしまう学生が増えていった。これに対して筆者が担当する四年次ゼミで、実験的に二つのことを行った。第一は、卒業論文に関する規定(写真9)や提出までのスケジュールなどの情報を貼ること、第二は、ときおり撮影したゼミの様子を貼ることである。教学に関する重要な情報や個人の思い出となるような写真が貼ってあれば、多文化パスポートは学生にとって意味あるものとなり、ゼミのたびに持参するように

なった。これらの点を踏まえて、後期のオリゼミでは「多文化読書リスト」を多文化パスポートに貼ることにした。これは、学生に読みたい新書のリストである。教員が二〇冊ほどリストアップした新書を、④多文化共生・宗教、⑤地域言語・英語学習、⑥アメリカの社会と文化、⑦キャリア教育、⑧サブカルチャーの五種類に分け、一枚五冊からなる「多文化読書」シールを二十四通り作成した。それを、オリゼミの学生の多文化パスポートに貼り、学生に読書を促すことにした(写真10)。読書後は、簡単な内容のまとめと感想を小レポートに書かせ、ゼミ担当教員に提出させるか、ゼミにおいて発表させることにした。

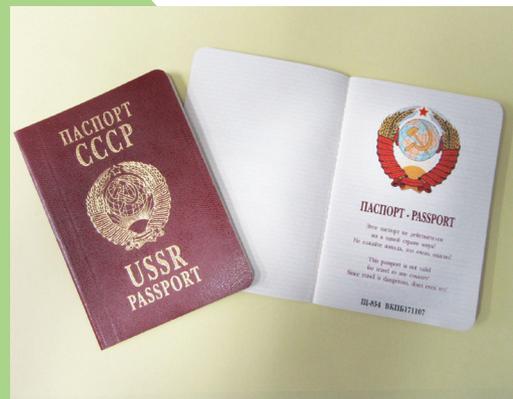
この成果は、今のところ不明であるが、順調にいけば、学生の多文化パスポートの利用促進と読書量増加という嬉しい結果が得られるはずである。こうして、多文化パスポートは学科の発展にもなって変化していくのである。



7.四国遍路納経帳

近年、納経帳やパスポートをモデルにした商品が各地で見られるのは、国内外への旅行者が増えたため、パスポート取得者の数が増えたためだと考えられる。パスポートがより身近になればパスポートのパロディ商品も立派な観光土産となるのである(写真8)。

こうした昨今の事情を踏まえて、多文化パスポートは考案された。学生が様々な活



8.USSRパスポート

動に積極的に参加することを期待して多文化コミュニケーション学科は多文化パスポートを作成した。

多文化パスポートを使用して最初に直面した問題は、シールを貼る基準であった。長期・短期の留学、海外でのインターンシップ、フィールドスタディーなどは問題なく二〇点であるが、一日だけのボランティアと数回にわたるボランティアをどのように区別するか、大学内のノートテイクなどのボランティアは何点にするか、地域言語の各種の検定はどのように基準を定めるか、など学科会議のたびに多文化パスポートのシールが議題に上がった。その都度、審議してシールの点数を定めていった。地域言語の検定については、審議が何年にもおよび、最終結論が出たのは二〇一七年暮れになってからであった(写真4参照)。

第二の問題は、パスポートにシールを貼る教員の手間であった。学生に多文化パスポートを携帯させるために、オリゼミでは、AUPガイダンスやキャリアガイダン



10.多文化読書リスト



9.卒業論文執筆規定

執筆者紹介（五十音順）

荒井 将志（あらい まさし）

国際関係学部国際関係学科・講師。主な担当科目は、多国籍企業論、国際ビジネス入門。

小張 順弘（こばり よしひろ）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・講師。主な研究分野は、応用言語学・社会言語学。主にフィリピンの多言語状況に関する諸相を研究テーマとしている。

太田 瑞希子（おおた みきこ）

国際関係学部国際関係学科・講師。主な研究分野は、国際金融論、EU経済論。

高山 陽子（たかやま ようこ）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・准教授。主な担当科目は、世界遺産論、テーマパーク論。

大塚 直樹（おおつか なおき）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・准教授。主な担当科目は、観光地理総論、フィールドワーク入門。

新妻 仁一（にいつま じんいち）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・教授。主な担当科目は、西アジアの社会と文化、アラビア語。

榎 KaYa 国際関係・多文化フォトジャーナル vol.05

2018年 3月31日発行
発行：亜細亜大学国際関係研究所
制作：株式会社キンドル

問い合わせ先
亜細亜大学国際関係学部
〒180-8629 東京都武蔵野市境5-24-10
<http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/>

本雑誌記事の無断転写を禁じます。
©2018 Faculty of International Relations, Asia University